
闇を好む者

天川時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇を好む者

【Nコード】

N7981E

【作者名】

天川時雨

【あらすじ】

夜の闇に魅せられ、引き返せなくなってしまった男の物語。

（前書き）

ホラーにしては怖くないので、ジャンルの設定に困りました…（汗）

夜の闇には何が潜む？

鬼か、はたまた得体の知れない魑魅魍魎の百鬼夜行か。

眠らぬ街、と言うものが在るらしい。明かりを手に入れて、人は夜を手に入れた気にでもなっているのだろうか？

闇に潜む者は、獲物をねらう猫のように、ひっそりと、息を潜めて、そこに居る。

闇を甘くみてはいけない。夜の闇の中には何が潜んでいるのか、誰にもわからないのだから。

夜の闇に魅せられてはならない。深入りすればすでにそこはあちらの世界。ヒトが踏み込むことを許されない、未知の世界。

おや、ここに一人、夜の闇に魅せられた男が居るようだ。ああ、何と哀れな。まったく、何と哀れなのだろう。

どうなるのだろうねえ。どうなるのだろうねえ、この男の末路は。楽しみだねえ。楽しみだねえ…

※※※

夜ってえのは素晴らしい。この平安太平の世の中で、夜の闇に紛れて盗みを働くこの何とも言えない感覚。握った拳にじわりと感じる汗、静かに、しかし確実にその間隔を早める胸の鼓動。実に素晴らしいじゃないか。

時は平成、世は北京オリンピックだ何だのと騒いで浮き足立っていて、平和ぼけにも程があるのではないかと正直呆れる。

俺はそんな世の中に生きる、平々凡々のフリーター。毎日働いて

いるし、まあ金も無いわけじゃあない。俺が求めるのは夜の闇に潜むスリル、これだ。だから時たまこうして夜の住宅街へと繰り出す。無性に夜の闇が恋しくてたまらない。俺は夜の生き物なんだと、漠然と思うことがある。俺は実は人間という皮を被った夜の生き物なのではないか、と。そんな想像馬鹿げている、なんて思いながらも、夜の闇に焦がれる俺の想いは本物で、この矛盾した感覚がどうにも俺を苛立たせる。

今日の狩り場に着いた。この時間この家の住民は例外なくリビングでテレビに夢中になっている。お気に入りの連ドラがあるらしい。つまり、二階はがら空き。狩りにはうってつけだ。

俺は狩りと言う言葉を好んで使う。暗闇から獲物をねらう獣のようで、その響きがたまらなく良い。

馴れた手つきで扉を越える。ここまでくれば後はリビングから一番遠い部屋の窓から入って二階の金目の物を頂戴して帰るだけ。なァに、下見は十分すぎるほど行った。全く心配するに足らない。

※※※

今日の狩りは簡単だった。簡単すぎて、俺が求めるスリルは十分には得られなかった。最近こういうことが増えた。場を重ねるにつれて、慣れが生じてくる。仕方のないこと、と言ってしまえばそれまでなのだが、やはりつまらない。欲求不満。

帰り道、少しの苛々を抱えて、俺は人気のない住宅街を縫うように歩く。

あァ、つまらない。

そう思った次の瞬間、俺は凍り付いた。通りの右側に在る電柱に、男が一人背中を預けて立っている。蒸し暑い夏の夜、茶色のロング

コートに革靴という出で立ちだったことが、彼を不自然なものとして強調していて、言いようもなく不気味だった。柄にもなく冷や汗が背中を伝うのを感じた。

男の視線が俺を捕らえた。その視線に怯む俺がいる。情けねえとは思うが、足が、身体が、全く動かない。

こちらに向けられた顔は、若かった。二十代前半というところか。切れ長の目、すっと通った鼻筋、恐ろしいほどにその顔は整っていて、男の俺ですら一瞬恐怖を忘れて惚けた。

「君は…夜の者になりたいのかい？」

俺が質問の意図が解らず口をぱくぱくしていると、彼はにこりと微笑んだ。そして俺の答えを待たずして、言葉を繋げる。

「わかっている、わかっているともサ。君は闇に、夜の闇に魅せられてしまったのだね。ああ、何と哀れなのだろうねえ。君はもう闇に染まりすぎているねえ。とても、とても綺麗な黒色だ。もう君は夜の者達に気に入られてしまったようだねえ。哀れだねえ、哀れだねえ！」

彼は何を言っているのだろうか。全く訳が分からない。何より、人のことを哀れだなどと抜かしておきながら、その声色、表情は愉快でならないとも言おうにはしゃいでいた。

「まだ人として生きたいのなら、せいぜい気をつけることだねえ。特に闇の濃い場所には。奴らは娯楽に餓えているから、君のような珍しい人間が面白くてたまらないのだよ。君が夜の闇を求めるように、奴らは君という娯楽を逃すまいと求めているのさ」

「ど…どういう…そもそも、お、お前は何なんだ…」

やっと絞り出した言葉は、情けないほど弱々しく、震えていた。この男の存在が、何故だかとても怖く怖い。

「ん？ 僕かい？ そうだなア、言うならば、夜の闇を好む者、ってとこだねえ。君と同じサ。君と違うのは、僕は君のように下らないちっぽけな好奇心や欲求のためにこの世界に身を置いているのではないということだ」

訳が解らない。同時に怒りがこみ上げる。見ず知らずの奴にけなされる筋合いはない。俺の顔から怒りを読みとったのか、男は俺を見てクスリと笑った。

「まア、僕の言うことを信じるか信じないかは君次第だ。後は僕の知ったことじゃあないよ。せいぜい夜の闇の濃い場所には近づかないことだねえ」

そう言うと、男は不気味な含み笑いだけを残して、消えた。文字通りその場から忽然と姿を消したのだ。俺はその後身体が思うように動かずその場に立ち尽くしていた。空を見ると、もううつすらと白み始めていた。

※※※

あの男と会ってから、一カ月が経っていた。やはり俺は欲求に耐えきれず、相変わらず夜の住宅街に身を置いていた。あの恐怖は忘れがたいが、あれから神社へ出向いてお祓いを受け、お守りを貰ったので、何となく安心していた。

ポケットにお守りが在ることを右手に感じつつ、今日の狩りへ急ぐ。

馬鹿でかい家だった。庭が俺の住むアパートよりも広い。庭木は丹念に手入れされていて、庭中花が咲いていた。俺はその花を踏んでしまわないようにそっと足を運ぶ。いつものようにリビングから一番遠い部屋の窓へと歩を進める。

俺の胸は高鳴っていた。そうだ、この感じ。コレだよ、俺が欲しくてたまらないのは。夜の闇と一体になるような、このスリル。たまらねえ。

もうすぐ、もうすぐで鍵が開く。はやる気持ちを抑えて、慎重に

鍵を開ける。あとちよつと…

——カチッ

目の前が急に明るくなる。

……やばい

顔を上げたときには、もう遅かった。中学生くらいの少女、この部屋の主が、俺を見下ろしていた。見る見る間に彼女の顔が歪んでいく。

「きつ…きやあああああつ！！！！！」

俺は脱兎のごとくその場を離れ、咄嗟に庭木の茂みに隠れた。服が汚れるのにもかまわず俯せになると、湿っぽいジメジメした感触が、Tシャツごしに身体に伝わってきた。

俺を探す声がある。俺は息を殺して、闇と同化する。

『貴様、闇を好むか』

突然頭の中に響いた声に、俺はびくんと身体を震わせた。

『面白い…』

慌て右手でポケットの中をまさぐる。お守り…お守りが…ない…『氣に入った。貴様の魂、夜の者に相応しい色をしている…望み通り、お前を…』

背後に何かの気配を感じて振り返ると、そこには暗闇から伸びた白い無数の手があった。悲鳴を上げるまもなく、俺はその白い手に捕まって、その場から跡形もなく消え失せた。最期に見たのは、嘲笑するようにこちらを眺める、黒猫の姿だった。

※※※

「一週間ほど前から行方不明の男性、二十三歳、フリーターの〇〇

〇〇さんの部屋から、盗難届の出ている品物が見つかり：」

「へえ：あの人〇〇〇〇って言う名前だったのかア」

茶色のロングコートに革靴姿の青年が一人、街角で新聞を眺めながら呟いた。その顔は恐ろしいほど整っている。その足下には、毛並みの美しい黒猫が行儀よく座っている。

「闇に捕らわれてしまったのだねえ：だから言ったのにねえ：」

言いながら青年はしゃがみ込み、黒猫の喉元をくすぐる。黒猫は嬉しそうにゴロゴロと喉を鳴らした。

「お前は見ていたのだろう？あの人最期を。綺麗な闇の者に、あの人は成れたのかい？」

黒猫は

「にゃん」と嬉しそうに鳴いた。それを青年は嬉しそうに見つめる。

「そうかい、そうかい。それは何よりだ」

一人と一匹は何処へともなく歩いていく。

青年の右手には、ぼろぼろになったお守りがぶら下がっていた。

夜の闇に魅せられてはいけない。夜の闇には、何が潜むか誰にもわからないのだから――

(後書き)

初の短編なので、感想などもらえると嬉しいです♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7981e/>

闇を好む者

2010年10月8日15時27分発行